

令和3年度 奈良市立伏見こども園 研究実践概要

園長名 和田 江利子
全園児数 166名

1. 研究主題 「主体的に活動し、自ら遊びを創り出す子どもの育成」
—好奇心を掻き立て、探究心を深めるための手立てとなる環境構成と援助の工夫—

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

初年度の研究により、子どもが自ら遊びを創り出すためには、心を動かすきっかけとなる事象が存在するということが分かった。そのきっかけとなる対象に着目し、子どもが「もの・ひと・こと」の身近な環境と出会い、主体的に関わるために、様々な事象に目を向けて好奇心を掻き立て、自由な発想で遊びを創り出し、探究心を深めていく過程について探っていきたく考えた。

そこで、本研究では、子どもが身近な環境に興味や関心を示す心の目を「感じる心」と捉え、その心で何を見出ししていくのかについて探ることで遊びを創り出すプロセスを明らかにし、好奇心や探究心を深めていく発達の姿を分析することにした。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

・身近な環境に主体的に関わる中で、「感じる心」で見出す子どもの発達の姿を読み取り、好奇心や探究心を深めるために必要な環境構成や援助の工夫について探り、自ら遊びを創り出す子どもを育む。

②研究の重点

- ・「感じる心」を可視化し、遊びを創り出す姿を捉える。
- ・「感じる心のあらわれ」「心が動く」「反応」「行動」「探究」の観点からみた事例の特徴を示し、仮説に基づいて検討し、好奇心を掻き立て、探究心を深めていく発達の過程について探る。
- ・実践事例を基に、各年齢の発達の姿を分析する。

③活動の方法

・子どもが身近な環境を通して様々な「もの・ひと・こと」と出会い、興味や関心を示す心の目を「感じる心」と捉え、感じる心によって「心が動く」き、心が動くことで見られる様子を“反応”“行動”“探究”に分類して表記(表1)し、この循環を図1に示す。また、これらの5つの観点から子どもの姿を読み取り、さらに新たな環境と出会い、「もっとやってみよう」「もっとこうしてみよう」「もっとこうしたい」と好奇心を高め、遊びを創り出して探究心を深めていく発達過程の姿を分析する。

図1 「感じる心」で遊びを創り出すプロセス

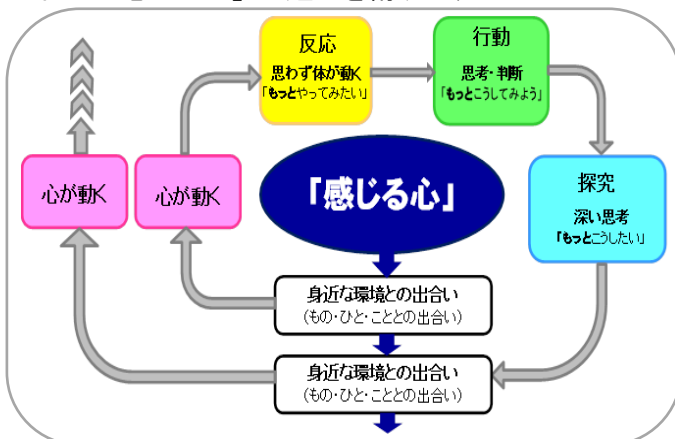


表1 5つの観点を捉え方

感じる心のあらわれ	「感じる心」で何を見たのか もの・ひと・ことと出会い 心で感じ取ったその対象
心が動く	感じる心によって心が揺り動かされた際の心の動き
反応	思わず体が動く様子 「やってみよう」→「もっとやってみよう」
行動	思考・判断により自ら考えて行動する様子 「こうしてみよう」→「もっとこうしてみよう」
探究	深い思考、こだわりをもって物事に向かう様子 「こうしたい」→「もっとこうしたい」

3歳児 「ドングリ入れたら出てきたよ」

(11月)

環境構成 援助

ドングリ遊びをする中で、容器や穴に入れることを楽しむ姿があったため、ジョウゴや筒など穴が開いた用具を多めに用意した。手に取ったペットボトルジョウゴにラップ芯がピタリとはまり、地面に立った様子を見て、A児はそこにドングリを入れた。①「面白い形だね」と声を掛けた保育者に「ここに入れたら出てくるの」と、嬉しそうに伝えながらやって見せた。その様子を近くで見ていたB児が「僕もしたい」と、ドングリを穴の中に入れ、続いてC児も加わった。何度も入れるうちに、下側のジョウゴがドングリでいっぱいになり、落ちる様子が見えなくなった。思わずB児がラップ芯を持ち上げると、ドングリが四方八方に広がって転がりだした。それを見て「ワーッ！」と嬉しそうな声をあげたA・B・C児に保育者は共感し一緒に驚き、転がる様子を見つめた。B児が再び地面にラップ芯を立てて持つと、A児とC児がドングリを入れ始め、いっぱいになるとラップ芯を持ち上げては、転がる様子を繰り返し楽しんだ。

感じる心のあらわれ

いっぱい貯まったドングリ

心が動く

落ちてこなくなった

反応

思わず持ち上げる

感じる心のあらわれ

四方八方に転がるドングリ

心が動く

ワーッ！出てきた

反応

転がるドングリの様子を見つめる

行動

もう一回する

<考察>

子ども達が喜んで遊んでいる遊びを読み取り、その遊びが存分にできるような環境を用意したことで、遊びが広がった。いっぱい貯まったことでドングリが落ち来る様子が見えなくなったことに不思議さを感じて心が動き、思わず手でラップ芯を持ち上げる反応を見せ、それによって四方八方に転がり出てくるドングリの動きにまた新たに心が動かされた。その心の動きに保育者が同じ視線で共感したことで、もっとやってみようとする姿に繋がった。



4歳児「えっ？雨降ってきた??」

(6月)

総合遊具の上から大量の水を流して遊んでいたことで、水がたまって落ちてきた。遊具の側で別の遊びをしていたJ児が、「あれ？ここだけ雨降ってる」と落ちてくる水に気づき、立ち止まって見ながら保育者に話しかけた。①「ほんとやね、なんでやろう？」と、思いを受け止めながら一緒に見て不思議さを感じる。J児は不意に遊具の下へ行き、落ちてくる水を全身でかぶって遊び始めた。J児「冷たい」と、水の流れを見ながら下を通ったり、止まったりしている。その様子を見ていたK児が近付いて一緒に水を被りながら、「ほんとの雨みたいやな」と嬉しそうに話すと、J児「雨やったら傘いるやん」と返す。K児が「じゃあ、傘つくったらいいやん、段ボールやったら大きいから雨に濡れないと思う」と思い付き、J児「じゃあ、段ボールでつくろう」と、会話が弾んだ。友達同士で思いを膨らませている様子を見守りつつ、いつでもつくれるように段ボールを用意しておいた。その後、2人は早速ダンボールに傘をかき始め、その形に切って傘をつくった。

翌日、それをJ児、K児と一緒に遊具の近くに置いておいた。2人は、遊具の方を見ながら水が落ちてくるのを待ちながら別の遊びをしている。しばらくして総合遊具から水が落ちてくると、嬉しそうにやってきた。J児「わあ、傘持って行こう」K児「うん。雨降ってきた！」と、つくった段ボールの傘を使って水が落ちてきた下へ立つ。K児「雨当たる！」J児「見て！ピチョピチョ」K児「大きい音する」等、気付いたことを伝え合い、降ってくる場所とタイミングが読めない落ちてくる水を待ちながら「今度はここから降ってきた！」と、移動しながら雨に当たりに行くことを楽しんだ。

感じる心のあらわれ

思いもよらない所から水が落ちてる

心が動く

なんで雨降ってるの？

反応

落ちてくる様子を立ち止まって見る

行動

全身で水をかぶりに行く

行動

水の流れを見ながら動く

感じる心のあらわれ

雨のように落ちてくる水

心が動く

本当の雨みたい！

反応

雨と言えば「傘」を連想する

行動

段ボールで傘をつくることを思い付き、つくってみる

感じる心のあらわれ

遊具から雨が降る

心が動く

やった！つくった傘使える！

反応

つくった傘を持って行く

行動

気付いたことを友達と伝え合う

行動

移動しながら当たりに行くことを繰り返す

<考察>

遊具から水が落ちていることに気付いたことを感じる心と捉えた。思いもよらない所から水が落ちていることに不思議さを感じて思わず体が動き、水をかぶってみようとする姿になった。また、友達が楽しそうにしている様子を見て、一緒に水をかぶる中で、雨、傘という同じイメージをもった。期待を膨らませながら実際に傘をつくり、使ったことで、嬉しさや傘に水が当たる感覚の面白さを共有し、もっと当たりたいと水の動きを読んで移動する姿に繋がった。思い付いたことをすぐに試せる環境をつくったことが、もっとしたいと思いを高めた要因であると考え。



5歳児「コースつくってみよう」

4月下旬～6月下旬

伏見スライダー(木製遊具)に上って、新聞紙のボールやキャップなどを転がしながら、何が使えるか保育者と一緒に話し合い、体育倉庫で透明トイや波板、脚立を見つけコースづくりが始まった。コースを長くしていく中で、透明トイを支えるように巧技台やコンテナなどを置く。透明トイがグラグラする様子を見ていた子ども達が「シーソーみたい」と話し、一番下までボールが転がり溜まると、A児は透明トイを上下に動かしシーソーゲームを始める。ボールを飛ばそうとしていたが「バンバン」と、支えにしている巧技台とぶつかる音が鳴り^①B児「音は鳴るけど、ボールは飛ばないね」と話す。話し合いの中で^②「どのようにしたい?」と、尋ねるとA児「飛ばしたい」と話し、^③公園のシーソーのようにタイヤを使ってバネの代わりにしてみようということになった。飛ぶ気配がない様子を見て、^④「タイヤを2段にした方がバネみたいになりそう」という子ども達の考えから、タイヤを重ねて使うと、シーソーの上でボールが高く飛ぶようになった。A児が飛ばしている姿を見て、B児「すごい、前より飛ぶようになった」と喜び、A児「もっと飛ばせるように力を入れてみる」と話し、何回も飛ばして試していた。^⑤しかし、ゴールのコンテナには入らず、地面にボールが転がり落ちる。話し合いで困り感を取り上げると、「ゴールの数を増やす」「ゴールを置く位置を変えてみる」など、子ども達が考えを伝え合った。さらに^⑥ゴールとなる箱の高さを低くすることでボールが入りやすくなるのではないかとという子どもの考えから、箱の高さを低くするようにした。前より入る個数が増えたことに友達と喜び、繰り返し試しながら遊んでいる。

感じる心のあらわれ

トイがグラグラ動いている

心が動く

シーソーみたい

反応

連想したことを伝える

行動

シーソーゲームを始める

探究①(つまづき)

思うように飛ばない

探究②(気づき)

タイヤを使ってバネにする

探究③(予想)

タイヤを2段にしたらバネみたいになるかも

感じる心のあらわれ

ボールが高く飛ぶ

心が動く

高く飛んで嬉しい

反応

高く飛んですごいと喜ぶ

行動

力を入れて何度も飛ばして試す

探究④(つまづき)

ゴールにボールが入らない

探究⑤(予想)

高さを変えれば入るかも

<考察>

透明トイがグラグラ揺れた偶然の出来事を見てシーソーみたいと心が動き、友達に伝えたことでシーソーゲームが始まった。つまづきを子ども達で解決してほしいという思いから話し合いの機会をもったことで高く飛ばしたいという思いが生まれ、タイヤの使い方を考え予想する姿に繋がった。話し合いの中で困り感を取り上げ、遊びを進めるようにしたことが、箱の数や位置、高さなどを工夫してボールを入れたいと追究する姿に繋がった。



感じる心のあらわれ

ティッシュが足りない

心が動く

もつつくりたい

反応

保育者に伝える

行動

困っていることをみんなに伝える

探究①(予想)

紙ってつくから紙になる

探究②(追究)

どれが紙になるのかな?

5歳児「どれが紙になる？」

5月上旬

すりこぎやすり鉢を使ってティッシュをすり潰し遊ぶ姿が見られた。継続して遊ぶ中で、F児「すぐにティッシュ無くなる」と保育者に伝えたことから、話し合う機会をつくった。F児が困ったことを聞き、「新聞紙、紙袋、紙コップ、布・・・」など、ティッシュの代わりになりそうな身近なもの出し合う。^①G児「紙って名前についているから紙コップも紙袋も紙になるわ」と予想したことを話した。話し合いで出てきた素材を用意しておいたことで^②何日もかけて一つ一つ試していく姿があり(表2)、それぞれの結果が違うことに驚きや不思議さを感じて、紙になる素材探しをすることに夢中になった。



表2 どれが“紙（ペーパー粘土）”になるのかな？

素材	子どもの探究の結果		素材	子どもの探究の結果		素材	子どもの探究の結果	
 紙コップ	できたけど、硬くて大変。		 布	手でちぎれない。ハサミで小さくしよう。	糸が出てきた	 新聞紙	ねずみ色だ。字が見える	
 紙袋	硬くて擦れない。		 牛乳パック	できた人とできない人がいる。	3層になっていて真ん中の白い所が紙だ！	 ティッシュ箱	白じゃなくてグレーだ。カバにしてみよう	
 画用紙	色がいっぱいあった！		 段ボール	茶色になったから、クマをつかったよ。		 巻き芯	ちゃんとフワフワになった	
						 紙テープ	友達と違う色になった！	

＜考察＞

素材が足りなくなり、もっとつくりたいと思ったことで心が動き話し合いの機会を設けた。話し合いの中で子ども達の思いを引き出したことで、身近なものを使って確かめ“紙”になるものが、ティッシュ以外にもあるという気付きに繋がった。それぞれの特性に気付き、感じたことを友達と伝え合いながら何日もかけて試行錯誤し、表2のような結果を子ども達自身で見出し、探究を深める姿が見られるようになった。

5. 研究の成果

3歳児は、目に付いたものや人の存在といった目に見えて分かりやすいものを感じる心で感じ取り、「不思議、面白そう」と直感的に心が動いて、思わず入れる、触る、動かすといった反応が見られ、図1で示す「心が動く」「反応」をループさせながら遊びを創り出していく過程が見えてきた。3歳児後半の時期になると、「やってみよう」とすぐに反応した後に、その面白さを「もっとしてみよう」と繰り返す思考と判断により自ら考えて「行動」する姿が表れてきた。子ども達の素朴な遊びに気付き、その発達の姿を読み取り、したいことが存分にできる環境を用意したことや、一人一人の遊びを認め、同じ目線で一緒に楽しさを共感する保育者の存在も重要であることが分かることが分かった。

4歳児は、偶然起こった出来事や現象に好奇心が掻き立てられ面白そうと感じ、心が動いて思わず体が動く「反応」だけではなく、動きや現象がどう変化していくのか等を目で追う目線から、自分がしたことどうなるのか確かめる特徴的な「反応」の姿を読み取れることが分かった。また、友達と面白さやイメージを共有しながら「もっとこうしてみよう」と工夫したり試したりして考えを生み出す「行動」の姿が多く見られ、行動したことで起こったことが新たな感じる心のあらわれとなって心が動き、「反応」「行動」とループを繰り返しながら遊びを創り出していく過程が見えてきた。そのためには、思い付きをすぐに試せる環境や子ども達のしたい思いを尊重し、受け止め、一緒に遊びながら見守る保育者の存在が重要であることが分かった。

5歳児は新たな発想に目を向け、心の動きに目的を実現させたい思いが読み取れる。「反応」では、思わず動くだけでなく、目的を実現させるためにこれまでの経験からひらめきを生み、次の行動に移る様子が表れている。「行動」では、協同性の姿が見え、さらに経験を活かしてアイデアを出したり、何度も試したりしながら様子を見るといった深い思考によって様々な方法で行動し、「探究」する姿に繋がっていることが分かった。このループを重ねる発達の過程の中で、保育者が子どもの思いを丁寧に読み取り、必要に応じて話し合いを重ねることで、新たなアイデアが生まれたり、友達の刺激を受けたりする姿に繋がったと考える。また、保育者も共に考えながら遊びに必要なものを一緒に用意することで、子ども達はものの扱い方や素材の特性などに気付き、目的を達成するために思考を巡らせ、柔軟な発想で遊びを創り出していく姿に繋がったと考える。

本研究を通して、子どもの発達の過程から、「感じる心」でどのような事象に目を向け、心が動くのか、子ども達が見つめる「心」を可視化することができた。また、その感じ方は成長とともに広がり、様々な事象に目を向けられるようになっていくということを見出せた。その中で、保育者がその心を理解する同様の心の目をもってることが必要で、子どもの目線から共に感じ取り、子どもの心に寄り添える保育者の役割が重要となった。

つまり、保育者自身も「感じる心」をもって共に心を動かすことが必要であり、共に心が動くから子どもと一緒に環境構成をしたり、発達や興味関心に即した援助をしたりすることができるのだということが分かった。

6. 今後の課題

研究を進める上で、子どもの自由な発想から生まれる感じ方や考え方を大切に保育の方向性が重要であり、子どもの姿を読み取り幼児理解を深めることで、より確かな保育の創造に繋がる。今後も実践を通して一人一人の子どもに寄り添い、豊かな感性と創造性の芽生えを育む教育・保育をめざしていきたい。